

# 園芸文化研究所助成研究報告

(一般研究の部)

## 恵泉の花弁装飾へ発展の歴史をたどる I

### 河井 道と花卉装飾

本多 洋子(園芸文化研究所)

恵泉女学園の創立者 河井道が園芸—植物、花を育てることを重んじたことは様々なところで紹介されているが、花を生活の中に生かすことについてはどうだったのだろうか。

河井が夢みたわたし自身の学校に加えたいと考えた科目、キリスト教と国際、園芸は広く知られているところではあるが、河井が望んだ園芸には植物を育てるだけでなく、植物を利用する事、花を愛でる事も含まれていたと考えられる。なぜ河井は植物の栽培だけでなく、花を生活の中に生かす、花によって生活を潤す事を教育の中に取り入れようとしたのだろうか。

河井の祖父、父とも伊勢山田の皇大神宮の神官であった。河井は最初の植物に対する関心はその祖父と父から得た。

祖父の小さな庭には、長い大きな葉をつけたばしょうの木があった。バナナは一度もならなかったけれども、この庭では一番立派な木だと私は思っていた。七折れにおかれた平らな飛び石のまわりに、松葉ぼたん

が咲いていて、桃色、白、黄の花が点々と、庭を色どっていたのを思い出す。祖父の家の窓辺には、垂れ下がったしだや、桃色のゼラニウムが植わった大きな貝殻で一ぱいだった。祖父は盆栽が好きで、これも色々もっていた。(わたしのランタンより)

花が好きであった祖父の家の庭で遊び、神宮の周りは古くからの大木が生い茂り、下草として季節ごとの花と接する機会を多く持ちながら、身近に植物を観察してよく知り、植物への愛着の念が育てられたものと思われる。

父 範康は、日本の古典や和歌に専念するゆとりを持ち、また茶道や活け花のけいこをする時間を持った。また紙や絹や藁で手芸品を作るのも楽しみであった。けれどもわけても一番の大きい楽しみは、庭にあった。花や苔、鳥や鳴く虫、また小石や庭石さえも、友とした。(わたしのランタンより)

後年、河井が野の花をびんに押しこんだのを見て、範康が河井をたしなめためたことがある。河井は、

「これは花瓶でもないし、花だって特別いい花ではないのです。ただちょっと道端でつんできただけなのですもの」と、口ごたえすると、父は、「野の花でも、栽培した花でも、花は花。安いものでも、高いものでも、花いけは花いけ」と言った。そして、「かためてぶち込んだら、あつくるしくて、息づまりそうだろう。葉を茎からおとしなさい。こちら側に花をいく分ひき上げて、茎を曲げてごらん。ちょうど露がおいて、風がそよぐように見せるのですよ。自然の姿に見えて、涼しい感じを与えなくては、いけない。」

いまでも、わたしは野花が、安ものの器におしつめていけてあるのを見ると、あの父の言葉を、初めて聞いた時のままに、ありありと思い出す。

(わたしのランタンより)

「野の花でも、栽培した花でも、花は花。・・・」「自然の姿に見えて」と言う範康の言葉が思い起こされ、生涯にわたって河井が花に親しむ、愛でるときの礎になったのではないかと思われる。

10歳の時に河井は北海道に移住、伯父の影響でキリスト教について学び始めた父の勧めで、11歳の時に札幌のスミス女学校(北星女学校)に入学した。スミス女学校は長老派の宣教師、ミス・サラ・C・スミス(後の北星学園の創立者)によって建てられた学校で、河井は植物に関する関心の多くをスミスから得た。

わたしたちが札幌に着いた時には、田畑は一面、深々と雪におおわれて、柵も塀も見あたらないほどだった。それから春が来て、あらゆる種類の思いがけない楽しいものが、いろいろの形をとって現れてきた。クロッカスがつもった雪をつきあげて花が咲き出てきた時には、わたしたちは、なんとうれしくて、声をあげてよろこんだことだったろう。・・・春ももっと深まるころ、先生方といっしょに森へ行って、野花をとって来て庭に植えたりした。庭に、わたしたちはめいめいが小さな地面を受け持っていて、好きなものを植えることが出来るようになっていた。こうして、だんだんと、園芸をする楽しみの手ほどきをうけた。・・・

ある日の午後、スミス先生は、ひと束のなでしこの苗をもち帰って門までの小道のふちに植えるのをわたしたちにも手伝っていいと言われた。・・・あとになって、道を行く人が門の前に立ちどまっては咲きほこる花が小道を縁どっている美しさに感嘆の声をあげるので、わたしたちは流した汗の一滴までも、十分報われたという気がした。(わたしのランタンより)

こうして河井は園芸をすることの楽しみと、花の美しさを名も知らぬ

人々と共有する喜びと、花には人の心を和ませ、感動を与える力があるということを知った。

札幌の名物になっているライラックは、明治の半ば頃、スミス先生がアメリカからお持ちかえりになったこと、またスミスは藪上(小使いのおじいさん)に鋤を担がせて採集させた野の花を狭い校庭に植え、その種類は70近くにもものぼったということなどから窺い知れるように、一通りでない自然と花の特別な愛好者であった。

そのころ北星では校庭のかなたこなたに、わすれな草、すみれ、パンジーなど小花が植えられており、花がさくようになると、寄宿舍の生徒たちは毎日曜小さい花束をいくつもつくって、聖句を書いた紙片を結びつけ、あちこちの病院に持っていったものです。これもスミス先生のご配慮から出たものと思われます。(白井品子 北星学園14回 恩師の面影)

和紙に花木を包んで贈るといような日本風の方法ではなく、西欧風の花束にして贈る。幼い河井も同じような経験を得たと推測され、喜びと感銘を受けたと思われる。

日本人は自然の愛好者だと思われている。しかし一方、どんなに美しくても名の知れない野性の花を無視して、歴史的に伝統的にたたえられているからといって、きまりきった花や鳥だけをほめそやすのは不自然な観賞の仕方である。どこの女学校にも園芸科が、さもなくても、簡単な花作りさえもとり上げられていないというのは、おかしいように思われる。しかしありふれたものの美しさを味わい、額に汗して自分の庭に花や野菜を作ることは、身も心も健康にするものである。(わたしのランタンより)

きまりきった花や鳥だけをほめそやす…。ありふれたものの美しさを味わい…。自らの教育・生活の中で生徒と共に花を育て、楽しむという姿勢にはスミスからの大きな影響があった。歴史や伝統に縛られず、神から与えられた自然を区別する事なく自由に受け入れる姿勢は河井の建学の精神の中に生かされ、自分の学校の中で園芸教育を志す端緒となったと思われる。

河井は非常に積極的に活動し、いつも忙しく仕事をこなしていたが、河井の仕事を理解し助けてくださる方々、学園を支援してくださる方々をよく学園にお招きになった。元短期大学園芸生活学科長 山口美智子、現恵泉女学園理事長 一色義子によると、そのような時には非常に細やかなお心遣いをなさり、お掃除やお茶などの指示をなさると同時に、「このテーブルの上にお花が欲しいわ」「ここにお花を飾ったらどうかしら」と、花をいけてお客様をもてなすことも、とても大切になさった。



写真① アフガニスタンからのお客様をお迎えしての国際親善デー(1936)

学園史料室に集められている写真を見ると、色々な方との会談の折、必ずといっていいほどそのどこかに花が飾られている。季節の花が一輪でも飾られていると、部屋の雰囲気は温かく生き生きとして、そこに集う人々の心を和ませ、寛がせることが出来るとの思いがあったと思われる。

また、自宅(河井は常に学園の一角に自室を構えていたが)にお客様をお迎えする折には、忙しくお出掛けから帰られると着替えをする暇もなく、外出着の上に前掛けをかけ、庭の花を摘んでいけ、お茶の用意などを自らなされた。

山口美智子は、ある時、ちょっとした時間に庭におり、丁度咲いていたガクアジサイを切って、円形の鏡の上に置いたガラスの器にサッと河井がいけたテーブルの花は息を呑むほど美しく、印象的であったと語る。そして、「あっ、先生にはセンスがおありだな」と思ったという。当時、鏡の上に器を置き、花をいけるという手法は珍しく、何度かの海外生活の中で得たものだったと思われる。



写真② グルー大使婦人をお迎えして(1939)



写真③ ガクアジサイを鏡の上に

河井がどんな花をいけたのか知りたく思い、山口の話をもとにその花を再現してみた。使ったガクアジサイはこの報告のために時期はずれに買い求めた鉢花から切ったもので、実際には白いもっと簡素な花だったと思われる。使ったテーブルクロスは学園資料室からお借りしたもので、赤い糸で「カワイ」と縫い取りがある。テーブルクロスも鏡も、お食事をする時には、お花を生ける時にはとあって河井が私有し、このようなことを日常から心がけていたことが推測される。

撮影場所は恵泉女学園大学 A 棟入り口のホールで、背景となっているのは旧河井療で使われていた調度類である。

また一色義子は、河井が一色家を訪れた折には 母ゆり（生涯にわたって河井のよき理解者、同労者であった）がいけた小原流のいけばなに必ず目を留め、季節の花を愛で、感想を述べ、また、御殿場にあり、長く修養会などで使っていた「山の家」で過ごされた折などは、散歩をしながら野の花を摘み、持ち帰って花瓶にさして楽しんでいたという。

河井は自分の学校を建てたいと考えた時、欧米の学校では河井が考えているような教科をどのように教えているかを知るために、再び太平洋を渡った（1926～1927）。

当時から欧米では花卉装飾（Flower Decoration）は花卉栽培（Cultivation of Flowers）とならんだ花卉園芸学（Floricultural Science）の中のひとつの部門としておかれているという事もその渡航経験の中から知ったと思われる。

高等部園芸科増設（1943）の趣意書には「関東大震災以降我が国の都市住民は頓に郊外田園生活に関心を深め、其の住宅周辺の零細なる空地を利用して蔬菜、花卉及び果樹等を栽培し、保健に合わせて家庭必要の一端を充たすの良風に傾くに至れり。而して日支事変勃発以来保健及び増産の必要を痛感すること逐年深刻化するに連れ、一般に田畑の労作には都鄙の別なく大に力を致すべき責任を覚えるに至り。殊に最近男子の手不足に伴い女子が主として此の方面の任務を担当する必要に迫り来るに及び、園芸に関する科学的知識乏しく、技能稚拙なるが為に空地の利用法に於いて、栽培の効果に於いて、また生産物の利用に於いて遺憾の点極めて大なり。今後時局下は勿論平時といえども蔬菜、花卉、果樹、庭樹等の栽培手入れ、生産物加工及び家畜家禽の飼養に対する女子の責任の益々重きを加ふるは当然の帰結にして、物心全ての点に於いて国力の充実を招来する為にはこれらが女子の家政と不可分の関係を到らざるべからず。

また病院にあるいは不幸の家に美はしき花を贈りて慰籍の誠意表わす美風を誰か難ずる者あらん。強度の緊張の結果とかく人身殺風景に陥り

あるいは荒怠に傾き安き時局下、底力あり不絶弛まざる緊張を産み出す真の原動力こそ清く和かにして嗜み深き家庭の雰囲気なれ。一株の花にても美はしく咲かしめ、青々たる蔬菜、可憐なる鶏雛をすくすくと育て上げる心懸と技能は、情操教育の見地よりしても見逃すべからず重要素なり。

なお、我が国の女性は今後続々と海外に進出して都市の勤労者または荒地の開拓者に嫁ぎ外地における家庭の主婦として立つ者多きを見るべく、これらの場合に於いて女子が園芸に対する深き趣味のみならず、科学的知識と実際の技能を有しておれば、内に自家の生活を潤し、生産を収めえるは勿論、なお外には指導者の位置に立ちてその地方のために貢献すること多大なり得る次第なり。

夙に平時よりこの点に着眼し、本学園に於いては創立当時より園芸科を全校の必修科目に加え、これに関する知識を授け、実習を課し、来りて今日に及び成績の見るべきものあり。・・・」

とあり、花(園芸)を生活の中の取り入れる重要性を認識し、また、開講予定学科目の中には蔬菜、花卉、果樹、造園庭樹、家畜家禽養蜂、生産物加工などと並んで「装飾」があった。

また、「中等教員の資格を有し、特に園芸の素養のある一女教師を選び、園芸修得の為三か年外に留学せしめたる者本年九月に帰朝し居り」とあって、河井自身が園芸について調査するだけでなく、園芸教育を実際に行なう者として山口美智子が米国に送られた(1940年渡米、1942年日米交換船で帰国)。

河井は様々な時に花があることを望み、山口がアメリカ留学から帰って(1942)からはクリスマスの装飾をするようにも言った。今と違って何の資材も無かったので薪



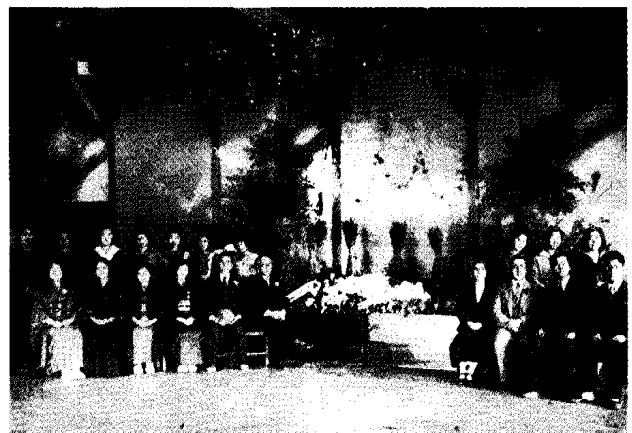
写真④ クリスマスリース(1946)



を土台に、紐で常緑樹を結わえ付けたスワッグ(壁飾り)が最初に作られた。その後、芯に梅の枝を丸め、椿などの枝をとめ付けたリースなども作られ、山口はキャンドルスタンドなどとともに講堂を飾った。当時、クリスマスの装飾としてはツリーが知られているだけで、リースは目にしたことも無く、生徒たちは感嘆の声をあげて喜んだ。山口に習い覚えた卒業生が家に帰り、母教会などでリースを飾ったりしたことなどから日本全国にクリスマスリースというものが知られ、今日のように楽しめるようになった

入学式、卒業式の折には初期に小原流華道を教えていた平光波、農専で花卉園芸学を教えていた岡見義男がいけたこともあったが、農専の卒業生で世田谷で園芸や理科の授業を担当した宇佐節子、川口安子、深谷佐紀子なども校庭などの木や草花を切って飾った。ある年の卒業式には校庭のモクレンを早く切って温室で咲かせ、水仙といけたという。日常の礼拝、授業のための広い教室などには絶やすことなく校庭のあるいは畑で育てられた何がしかの花が飾られていた。

1953年度用の恵泉女学園短期大学園芸科の入学案内には「欧米では草花の栽培、小庭園の設計、リースとか花束の作製、あるいは食卓の花卉装飾等は教養の高い女性の大切な常識となっている。わが国ではこの方面の理解が乏しく本学園も



写真⑤ 収穫感謝祭(1933)



写真⑥ 河井先生の米国の友人から寄贈されたピアノでの音楽の授業風景  
(教師：津川主一)(1935)

あまり知られていないが、わが国唯一の女子園芸大学で園芸の女子に適した分野を通じて女性の教養を高め、科学的思考力を養いつつ職業教育を施している。基礎理論と共に実験実習に重きをおいて理解の徹底、豊富な技能の習得を充分ならしめている。教師は校内に学生と起居を共にし、終日学問および精神上の問題の指導に当たっている。草花の咲き乱れた校内の芝生に内外の校友を迎える寮のプレーデー、習得した花卉装飾の技術を凝らして草花や農産物で美しく飾られた秋の収穫感謝祭、また荘厳で楽しいクリスマス等、学生生活は楽しく豊かである。」とかけられている。

恵泉女学園史料室の協力を頂いて調べたところ、「花卉装飾」という言葉を見出すことが出来る公の文書は現時点ではこれが最初であるが、感謝祭に講堂を花や農産物で飾ったり、普通部1回生の入学式にはデージーの花をつけ、卒業の折には学内の花で作った花束を贈ったり、その後の卒業生の胸に



写真⑦ 普通部1回生の卒業の時(1934)



写真⑧ 高等部1回生卒業記念写真(1936)



写真⑨ 留学生科1回生の卒業記念写真(1937)



写真⑩ 花の日のメイクィーンを祝福する  
河井先生(1942.5.)

は生花を飾ったりと実際的な内容は取り入れられていた。

当時、花を購入するという事はかなわず、校庭の花などを切ってまとめていた。卒業時期の3月は花が少なかった為か、普通部1回生の卒業時の花束の花は同じではなく、様々である。当初は花束であったが卒業生が多くなると花束を作ることは難しくなり、少輪で済むコーサージ(胸飾り)になったのではないだろうか。この頃のコーサージは今の様な資材(ワイヤーやフローラテープなど)を使わず、リボンなどで束ね、それをそのまま下向きにとめ付けている。これらは河井が直接指導したのではないかもしれないが、このような事を行っていたのは河井の考えによるものであろうと、山口は語る。

1946年、新宿御苑の温室管理、また、外国からの来賓のための宮中の晩餐会のテーブル装飾等を担当していた岡見義男が宮内省を退き、教授として恵泉に着任してから花卉園芸学を担当し、その頃からテーブル装飾や花束の作り方が花卉園芸学の講義、実習、寮生活の中で教えられた。

1947年の専門学校農芸科1回生山内久江(現中林)、松井昭子(現吉岡)が共同で書いた卒業論文のテーマは「花卉装飾」であった。1948年には専門専修科目として3年生に畜産、昆虫などと並んで「花卉装飾」が置かれた。

河井にとって花を愛でるということは、見た目の美しさだけを求めるのではなく、また、花を単なる観賞の対象に止めるのではなく、人間の心にまでもかかわってくる、いわば心の糧とする術<sup>すべ</sup>を学ぶものとならえ、それまで日本に無かった花卉装飾という科目が教育の中に必要であると考えたと思われる。花が蕾をつけて育ってくる経過をしっかりと見ていないと表現できないもの、神が与えた自然の美しさを学ぶことを恵泉の花卉装飾の中に求めたのではないだろうか。

その後、山口美智子、石井勇義教授、末光績理事らがそれに大きく係って正式な科目設置を考え、清水二郎第二代学園長、山下安武園芸科主任

の尽力により、日本で初めて花卉装飾という科目が文部省によって認められた。

花卉装飾という科目が文部省から認可されたのは短大発足と同時であったと考えられるが、公の文書としてはまだ確認できていない。当時の授業内容、恵泉園芸センターの発展など、まだまだ調査の及ばないところが多くある。今後もさらに調査を進め、報告させていただきたい。

河井道.「私のランターン」. 恵泉女学園. 1968.

河井道.「スライディング・ドア」. 恵泉女学園. 1995.

恵泉女学園.「恵泉女学園五十年の歩み」. 恵泉女学園. 1975.

北星学園同窓生.「恩師のおもかげ」. 北星学園同窓生.

恩師のおもかげ刊行会. 1964.